

同志社大学

2010年度 卒業論文

論題：かまどベンチが地域コミュニティにもたらす役割
ー彦根工業高校手作り防災かまどベンチの活動事例よりー

社会学部社会学科

学籍番号：19071009

氏 名：藤井 裕之

指導教員：立木 茂雄

〈本文の総字数：20,684字〉

要約

〈手作り防災かまどベンチ〉が、ソーシャルキャピタル形成促進要因の5因子を満たすのかということテーマにかまどベンチが今日のコミュニティ活動や地域の防災活動にどのような役割を果たすのかについて本論文はその研究と調査、分析、考察を試みた。「防災かまどベンチ」の実体に迫り、様々な活動事例を紹介していく。また研究の指標としては、ソーシャルキャピタルを中心に展開している。今回の論文の調査分析手法としては、ソーシャルキャピタルの指標を新たに質的調査のインタビュー方法を用いて分析考察に組み込んだ。その手法を用いて〈手作り防災かまどベンチ〉の有効性を実証した。その結果としては、インタビューの回答からそれぞれ5因子に当てはまるというひとつの研究成果を導いて、〈手作り防災かまどベンチ〉の有効性の実証に成功している。今後〈手作り防災かまどベンチ〉が地域コミュニティのソーシャルキャピタルを高めるひとつの仕組みとなることで、より一層様々な地域コミュニティが発展していく可能性を信じてやまない。

キーワード

「手作り防災かまどベンチ」「ソーシャルキャピタル形成促進因子」「質的調査」

目次

はじめに.....	1
1 先行研究.....	1
1.1 コミュニティに関する研究.....	1
1.2 ソーシャルキャピタル.....	2
1.3 滋賀県仕組みづくり検討会の事例.....	5
2 手作り防災かまどベンチ.....	7
2.1 防災かまどベンチとは.....	7
2.2 防災かまどベンチの取り組み事例.....	8
2.3 研究仮説.....	10
3 研究調査概要.....	11
3.1 調査概要.....	11
3.2 調査の枠組み.....	11
4 研究調査分析考察.....	13
4.1 結果と分析考察.....	13
4.2 結果からの考察.....	19
おわりに.....	19

注釈

参考文献

はじめに

我が国、日本の歴史は、自然災害の歴史といっても大きな間違いはないであろう。近年の記憶を遡ってみても、阪神・淡路大震災や新潟中越地震、また奄美地方を襲った集中豪雨や新潟県中越市、福井県会津市を襲った豪雨は、記憶に新しいであろう。しかし、そういった自然災害に対して、わが国では、様々な町づくりの活動や防災や減災に力を入れて取り組みを行なっている地域コミュニティが数多くあることは、是非とも認知してほしいものである。本論文では、そういった防災や減災の視点を取り入れた活動の中から〈防災かまどベンチ〉というテーマに絞って、コミュニティのあり方を研究したパットナムが説いた〈ソーシャルキャピタル〉をさらに深層で考察した立木〈2008〉の〈ソーシャルキャピタル促進要因〉を〈防災かまどベンチ〉が満たすものかどうかという一つの仮説を、質的調査によって、分析、考察を試みることにした。

本論文の構成としては、第一章では、コミュニティに関する先行研究を取り上げる。今日の防災や減災に関する行政や、地域の動き、またソーシャルキャピタルについての研究、またそこから導き出されたソーシャルキャピタル促進要因について記述していく。第二章では、〈防災かまどベンチ〉の実体に迫り、その活動事例なども記していく。第三章では、本研究の調査研究の概要、枠組みを提示し、第四章で本論文の核である調査研究を記述し、第五章で考察をし、第六章で本論文のまとめをするといった流れで進めていく。

1 先行研究

1.1 コミュニティに関する研究

本研究において、今まで数多くされているコミュニティの研究は、見逃せないものである。ここでは、コミュニティ研究の流れを記していく。そもそも〈コミュニティ〉は、共同性と地域性をから生じる共同体という専門用語として社会学者間では理解されていた(G. A. Hillery 1955=1978)。1967年、国民審議会報告書では、コミュニティとは、自発的な個人や家庭を構成主体にして、地域性と共通目標を持った開放的で民主的な人のつながりであり、都市における人間性回復の場となるべきもの(国民生活審議会 1969)となっている。

地域コミュニティへの政策的・学術的な関心としては、戦後2度にわたって高まりがある。まずその第一の高まりとしては、1960年代の高度経済成長期の産業構造の変化や、それに伴う都市化により、地域共同体が崩壊し、その一方で都市近郊に進出を始めた新住民層が行政に対して地域生活を送る上での基礎的な環境整備を求める住民運動への対応から生じたものである。1970年代になると、「コミュニティ意識」に関する社会調査が精力的に実施されるようになった(岩崎ほか 2008)。その結果、〈奥田モデル〉・〈鈴木モデル〉などが展開されることとなった。〈奥田モデル〉・〈鈴木モデル〉に関しては、後述する。第二の高まりとしては、次のようなことがある。現在の日本では、少子高齢化や、家族形態の多様化および個人化、価値観の多元化、高度情報社会化と

いった時代の流れの影響を受け、地域の共生力の脆弱性が進行しコミュニティをめぐる潜在的な問題が様々に発生している。さらに、地域の身近な問題の解決は、行政に頼るのではなく住民自らの手で進めるべき(進めざるを得ない)という地域ガバナンス(統治)論の高まりが起こっているというものである。

先ほど紹介した〈奥田モデル〉と〈鈴木モデル〉に関して言うならば、奥田道大(1971)は、人間性回復の基盤としての地域コミュニティは自由を尊重する戦後民主主義という普遍的価値意識と市民的責任に誘発された個人の主体的な社会参加行動というこの二つのベクトルの力で形成され则认为した。そこから(地域共同体モデル)(伝統型アノミー)(個我モデル)(コミュニティモデル)という四つのコミュニティ類型を導き出した。また、鈴木広(1978)は奥田モデルのコミュニティ意識尺度では、コミュニティへの価値意識と参加行動が渾然一体となっているために、その意識はあっても実際には行動しないといった現象は把握できないと考へた。そこで、別個に操作的な尺度を開発した。それが、コミュニティ意識に含まれる価値規範意識としてのコミュニティ・ノルムと地域の共同体への参加意欲としてのコミュニティ・モラルである。奥田・鈴木モデルから〈コミュニティ〉とは、住民からの生活要件を受けて、そこから共同施設・金融施設・商業施設・学校・広場公園などの行政が計画的に配置する対象となる地域のこゝとして行政施策としては、理解されるようになっていった(磯村 1978)。

そういった様々なコミュニティに関する研究から阪神・淡路大震災以後には〈自律〉と〈連帯〉という二つの市民的価値規範意識に注目されるようになった。〈自律〉とは自分のことは自分で決定し、自らを律していく、そして街づくりの主役は自分たちだという意識をもち自助を出発点とする規範意識であり、個人としての市民が自らに対して〈対自的に〉抱く規範意識である(岩崎ほか 2008)。〈連帯〉とはみんなが強いわけではないという配慮のもとに、みんなで助け合うという価値規範である。ただし、助けられて当然・・・自分だけ特別という依存や身勝手は許されない。あくまでも自助を前提とした共同性の意識であり、個人として対他的に抱く価値規範である(岩崎ほか 2008)。というような新たなコミュニティの価値規範が見出されているのである。

1.2 ソーシャルキャピタル

ソーシャルキャピタルとは、社会資本と日本語訳されている。これは、Robert D. Putnam によって定義された。Putnam によれば、社会資本は、調整された諸活動を活発にすることによって社会の効率性を改善できる、信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴をいう(Putnam 2001=1994)としている。また、そういったソーシャルキャピタルの存在を、自身のイタリアの州制度や政府の調査(Putnam 2001=1994)や米国における社会変化の調査考察(Putnam 2000=2006)から実証した。ソーシャルキャピタルの具体的なものとしてパットナムは、愛他主義や、ボランティア、慈善活動—他者を助けようとする対応体勢(Putnam 2000=2006)としている。またわが国の 2002 年の内閣府委託調査によれば、わが国の地域別のソーシャルキャピタルの定量的な把握を試み、相対的には大都市部で低く、地方部で高いという結果を得た。この試算結果を用いた部分的な分析ではあるが、例えば失業率の抑制や出生率の維持などの国民生活面でソーシャ

ルキャピタルが寄与している可能性が認められた(ソーシャルキャピタル調査研究会 2010)と調査の結果を明らかにしている。

そういったところから岩崎・立木がソーシャルキャピタルは、コミュニティ意識の規範的側面〈コミュニティ・ノルム〉とも、コミュニティへの参加意欲〈コミュニティ・モラル〉とも性質を異にする要素であると考え、操作的な尺度を用意し、コミュニティ意識や地域ガバナンスとの相互関連性を検証(岩崎ほか 2008)した。その結果は次のようになった。立木は、近隣パーソナル・ネットワークの規模や一般的信頼といったソーシャルキャピタルを源流の変数として位置づけ、自律・連帯という市民的価値規範〈コミュニティ・ノルム〉を媒介して、自律系のコミュニティ・モラル(地元への関心・活動参加意欲)と連帯系のコミュニティ・モラル(まちなみへの愛着・満足感)がそれぞれ強められるとともに、ソーシャルキャピタル変数(近隣パーソナル・ネットワークや一般信頼)自体が両モラルを高める直接効果をも有すること、そして2種類のコミュニティ・モラルが地域ガバナンス意識を直接的には規定していることを明らかにした(立木 2008)。また、そこから導き出されたモデルが示唆するものとしては、ソーシャルキャピタルが豊かであれば、結果としてコミュニティ・ノルムやコミュニティ・モラルが醸成され、これらの産物として地域におけるガバナンス意識は形成されるというものである(立木 2008)としている。

また立木は、神戸都市問題研究所「ソーシャルキャピタル協同政策研究会」で行なった神戸市内における9つの地域活動の事例分析を行なった。その中で、ゆるやかな人のつながりができることやお互いに思いやりをもつ、信頼することや、親切、おせっかいをやく、またお互い助け合い、友達になるといったことが生じる時、その間のソーシャルキャピタルは豊かである(立木 2007)と定義した。さらにソーシャルキャピタルは、自律と連帯といった市民的価値規範や活動意欲を高め、地域活動を活性化させるために人と人との間に結ばれる豊かなつながりの核心と捉えた。そして、具体的な地域づくりの活動と政策的な関連性を検討したのである。その結果、曖昧に語られてきた地域づくりの活動を8つの接近軸に整理して、ソーシャルキャピタルとの関連性を明示したのである。その接近軸の具体的なものが、〈地域・テーマの興味の軸〉・〈愛着を深めるという軸〉・〈あいさつの軸〉・〈イベントの軸〉・〈こどもとの関わりの軸〉・〈多様な住民参加の軸〉・〈共通の課題の軸〉・〈行政の支援の軸〉・〈組織の自律力の軸〉の8つの軸である。そしてそれぞれの軸が、ソーシャルキャピタルを醸成するものとした。それらを説明していくと次のようなものになる。

第一の地域・テーマの興味・愛着を深める軸の方向性としては、地域の伝統・文化・魅力・活動、生活に役立つ情報を知る、地域の魅力やウリ(自慢できるヒト・モノ・コト)を探し出し、発信する、地域で世話を焼くものをつくる、(地域)から離れて、(テーマ)を中心とした人の輪もできるので、この活動を通じて地域活動に目を向けさせる、地域にあるたまり場が、地域への関心・愛着の源泉になるといったものである。

第二のあいさつの軸のその方向性としては、様々な年齢・性別・社会階層間で、あいさつを励行すること。また子ども・学校・地域を活用すること。あいさつを地域に浸透させる技術を確立するといったものである。

第三のイベント軸の方向性としては、イベントを主体的に企画する。またイベントを主体的に開

催する。ほかにはイベントに主体的に参加することや、具体的に出来るイベント例を提示する。イベントを支援することや、地域課題解決のために活動をイベント化するといったものである。

第四の子どもとの関わり軸の方向性としては、こどもと大人の共同参加を広げることや、多様な年代の幼児・児童・生徒が集えるたまり場をつくること。またこどもの手によるイベントづくり、参加を勧める。ほかには学校・団体と連携するといったものである。

第五の多様な住民参加軸の方向性としては、自治会だけでなく、ボランティア、NPO、商店街、事業者など、多様なステークホルダー（ゆるやかな関係者）が参加できるプラットフォームをつくることや、地域にあるサークルや井戸端会議の場を発掘し、広げ、プラットフォームに誘い、地域活動につないでいく。また多様な市民が互惠・対等・平等に参加するための技術を身につけるとともに、多様なステークホルダーをつないで橋渡しをする仲介者を活用する。多様な参加を保証する民主的な組織運営を行うといったものである。

第六の共通の課題軸の方向性としては、地域課題に関する情報を共有し、解決の必要性・可能性への住民の気づきを促す。また、地域課題を共有するための場やしきみをつくるというものがある。

第七の行政の支援軸の方向性としては、次のようなものである。直・間接の合意の支援を行うことや、地域担当制によって顔の見える行政化を進める。ほかには地域の自律性・自主性に応じて資金の支援をすることや既存制度の拡大をするといったものである。

第八の組織の自律力軸の方向性としては、核となる複数のリーダーと、リーダーを支えるフォロワーの存在の重要性や組織の継続性を確保するために知恵をしぼること。自主事業を行うための自主財源を確保することや、多様な事業者・団体と連携することで、逆に組織の自律性を高めることができるといったものである。

以上の立木が導き出したソーシャルキャピタル形成促進への8つの接近軸をさらに詳細な活動具体例をもとに尺度を開発した。調査概要としては、神戸市内の自治会・管理組合に対して基礎調査に加え、地域の自治の担い手である自治会・管理組合の代表者が、自らの地域のソーシャルキャピタル形成促進要因の実態や地域の安全・安心にかかわる事象をどのように捉えているかについての調査を行い、そこから回収された1813名の回答の探索的因子分析結果より〈多様な住民参加〉・〈イベント活用〉・〈組織の自律力確保〉・〈興味・愛着喚起〉・〈あいさつ〉の5因子をソーシャルキャピタルの促進に関連させた（立木 2008）。5つの要素としては以下のものがある。

第一因子としては〈多様な住民参加〉因子が設定された。そのキーワードとしては、いろいろな人たちが参加する。連携をとる。地域にある人間関係活用が重要である。子どもの参加や、地域課題を解決するために活動をイベント化するといったものである。

第二因子としては〈イベント活用〉因子が設定された。キーワードとして〈たまり場〉の活用というのがあげられた。また8つの接近軸の〈子どもとの関わり〉はこの〈イベント活用〉因子に組み込まれている。

第三因子としては〈組織の自律力確保〉因子が設定され、〈組織の自律力〉という部分に主眼が置かれている。また、この軸には、〈行政の支援〉軸で想定された〈行政と対等な関係を保つ〉とい

う項目もあわせて含まれる〈立木 2008〉さらに、8 つの接近軸の中の〈共通の課題〉〈行政の支援〉は〈組織の自律力確保〉因子含まれることとした。

第四因子は〈興味・愛着〉因子とされ、〈地域・テーマへの興味・愛着を深める〉軸が中心となっている。

第五因子は〈あいさつ〉因子として、〈あいさつ〉というキーワードに根ざしたものとなっている。

立木が行った研究より、以下のことを述べている。

モデルの構造化について検討すると、第 1 に 5 つのソーシャルキャピタル形成促進要因〈多様な住民参加、イベント活用、組織の自律力の確保、興味愛着の喚起、あいさつ〉は、それぞれに地域のソーシャルキャピタルを高める効果が確認された。これは、立木(2007)が提唱したソーシャルキャピタルの形成促進要因の根幹部を、実証的データを用いて実証するものである。すなわち、地域のソーシャルキャピタルを増やすには、1.多様な住民や事業者、団体とゆるやかな連帯のネットワークを張り巡らせること、2.多種多様で、多くの住民が参加できるイベントをかつようすること、3.組織としての自律性や継続性を維持する工夫をすること、4.地域やテーマの魅力や「売り(セールスポイント)」を発信し、住民が地域を知り愛着を高められるような働きかけをすること、5.近所同士であいさつを意識的に励行すること、といった 5 つの要素は、それぞれに地域間の交流や互恵的な規範、信頼を高める力を有していた。(立木 2008:69)

以上のことから立木の研究が、ソーシャルキャピタルがコミュニティにもたらす効果を実証しているのである。本論文では、このソーシャルキャピタル形成促進の 5 因子を研究のひとつの指標として研究を進めていくことにした。次に、〈手作りかまどベンチ〉について、地域の取り組み事例をもとに紹介していくこととする。

1.3 滋賀県地域減災仕組みづくり検討会の事例

2010 年 7 月 26 日から滋賀県では、地域減災仕組みづくり検討会が開催された。近年、防災における自助・共助の重要性が高まる一方で、核家族化や少子高齢化、都市化や過疎化といった社会情勢の変化に伴い、地域コミュニティの機能の低下が問題視されている。現在では、地域における自助・共助による減災・防災の担い手である住民、企業・団体、学校などの地域の構成員が防災において果たすべき役割を意識して、連帯や協働のもと、地域の特性を踏まえた減災力・防災力を発揮することが求められている。そういった観点から、滋賀県防災危機管理局が問題解決に向けて検討を行い、〈滋賀モデル〉とも言える新たな仕組みづくりを展開することを目的として開催されたものがその検討会である。

検討会では、次のようなことが議論の対象となった。ひとつは〈自助・共助・公助をどのように地域の中で築き上げていくのか〉ということである。また、特に〈共助〉のしくみづくりをどのように解決していくかは、災害時に行政などの公助の機能が期待しにくく、その中で地域の〈共助〉の仕組み



図 1: 第四回滋賀県地域減災仕組みづくり検討会の様子その 1



図 2: 第四回滋賀県地域減災仕組みづくり検討会の様子その 2

についてが、特に議論の対象となった。ふたつ目としては、消防団員の現実で、その消防団のうち 75%がサラリーマンという問題である。その問題としては、ビジネスアワーで災害が発生すれば、消防団員が機能しなくなるというのである。そういった中で、消防団 OB・女性参加・組織化が重要だという議題も出た。三つ目としては、「言うは易し、行ふは難し」という言葉から、その災害に対する意識が浮上した。実際に体験することが出来ない、見えないものに対して、実際に防災や減災という活動には、なかなか結びつかないというものである。それは次に述べるものにも当てはまっている。四つ目には滋賀県の災害に見舞われない地域性もあって、災害イメージが持てないというものである。災害はどこか他人事で、我が事としてなかなか考えることができないのが現状なのである。また、五つ目には、実際に災害が起きてしまった時についての議論がなされた。その問題としては、災害に見舞われた時その後の経過を考えていない人々が圧倒的に多数だということであ

る。大きな地震災害などが起こったときに、実際に復興や復旧が長期的になるという時間軸のイメージを、非被災者が想定することは難しく、復興過程や期間の全体像を市民が把握することが重要であると検討会ではそういったところまで議論が及んでいる。

その検討会の中で、〈滋賀モデル〉として注目されているのが〈手作り防災かまどベンチ〉である。〈手作り防災かまどベンチ〉については、第二章でその詳細の説明をしていく。

2 防災かまどベンチとは

2.1 防災かまどベンチとは

内閣府 HP によると〈防災かまどベンチ〉は、災害時に“かまど”として利用でき、レンガ囲いの土台の上に、木製の座板を乗せたもので、通常はベンチとして使用できる(内閣府 2010)。これは、完成品をそのまま備え付けるというよりは、地元の住民や学校が力を併せて手作りで製作をするものである。コンクリートの基礎づくり、レンガの積み上げ、座板の作成と仕上げ、完成後の炊き出し訓練など、工程ごとに数日間現地に通うことから、学校や地域住民との交流が深まり、地域全体で自然に防災についての意識が高まっていくのである(内閣府 2010)。「災害は忘れた頃にやってくる」などとは言えないほど現代、日本には様々な自然災害が発生している。そんな中、手作りの〈かまどベンチ〉の作製を通じて、災害に備えるだけでなく、地域の中での交流をもたらし、幅広い年代の人々が一体となって防災意識やソーシャルキャピタルの向上をはかることのできる取り組みについて、記述していく。



図 3: 椅子として使用されるかまどベンチ



図 4: 炊き出し時に使用されるかまどベンチ

2.2 防災かまどベンチの取り組み事例

(1) 滋賀県立彦根工業高校の事例

手作りかまどベンチの試みは、滋賀県立彦根工業高校の田中良典教諭が、生徒たちと共に始めたものである。田中教諭は、元々、何か地域の役に立つことをしたいと思い、小学生の子供たちと地域の安全マップなどの作成などにも取り組んでいた。現在勤務されている学校が工業高校ということから、何かものを作ることで地域に役立つようなものはないかと考えていたときに、防災展示会で〈かまどベンチ〉に出会ったという。完成したベンチを置くのではなく、一から作ることはできないかと考えた。さらに、生徒たちだけが〈かまどベンチ〉の制作に関わるのではなく、近くの地域の方や小学生の児童と一緒に作ることができればよいのではという考えに至り、〈手作りかまどベンチ〉を一つの地域コミュニティのコミュニケーションの機会を設け、地域コミュニティの絆や繋がりが深まる仕掛けとして考案したのである。

最初の設置場所は、安全マップづくりや花壇製作などで交流があった近くの小学校に決め、安全マップの活動の中心となっていた防災研究班の高校 2,3 年生が、小学 6 年生の児童をしながら共同製作することとなった。共同制作の様子を田中教諭はこのように話している。「はじめは恥ずかしがって話しづらそうでも、1 回行くと半日ぐらいいっしょに作業を行いますから、次第に打ち解けて盛り上がっていきます。生徒たちも学校を離れての作業が新鮮なのか楽しく取り組んでいるように感じました」(ぼうさい) 2010 年 12 月現在で、彦根工業高校が製作した〈かまどベンチ〉の数は合計で 8 基にもなる。この取り組みは、防災教育チャレンジプラン防災教育特別賞を受賞、また同年、阪神淡路大震災で被災した兵庫県などが主催する「1・17 防災未来賞 ぼうさい甲子園」で奨励賞を受賞するなど、各方面から注目されている(ぼうさい 2010)。

田中教諭は、かまどベンチについてこのようにお話しされている。「かまどベンチを作ることによって、防災の基本はハード面だけでなく、「人」であるという考え方に変わりました。防災には、人と人との交流が大切だということも改めて感じました」(ぼうさい 2010) また「かまどベンチの良いところは製作過程で交流が深まるだけでなく、生徒たちと小学生や住民の方たちと作ったものが形に

なっに残ることです。公園を通り過ぎる時にかまどベンチを見たときに、災害への危機感はなくとも、製作の思い出を振り返りながら防災を考えてもらうことができるはずです。また、手作りですから、耐久性には問題があるかもしれません。でも、みんなで補修する機会があれば、さらに交流が深まるでしょう」(ぼうさい 2010)と話し活動を通して成長していった生徒たちに、高校生が中心とした活動が、幅広い世代の人との交流を実現させる可能性を持っていると考えているようである。

(2) 神戸市東灘区魚崎 FF の取り組み事例

神戸市東灘区の魚崎小学校の児童や卒業生の父親が立ち上がって「魚崎 FF(魚崎小学校おやじの会)」という組織を展開している。地域住民や PTA と協力しながら、地域を盛り上げるための取り組みや活動をされている。その中で、〈手作りかまどベンチ作り〉を一つの活動として展開された。2010 年の 8 月より小学生の夏休みを利用して、何回かに作業過程を分けて完成させた。完成後も、すいとんやカレーを作るなどの実践を行い、災害時を想定しての炊き出しも行われている。



図 5: かまど作りのレンガ積みの様子



図 6: 完成したかまどベンチの様子



図 7: カレーの炊き出しの様子

(出典: 魚小 FF 〈魚崎小学校おやじの会〉ホームページ 2010)

(3) 栃木県宇都宮市宝木中学校の取り組み事例

栃木県宇都宮市宝木中学校の創立 30 周年の記念になるものとして、宇都宮市宝木中学校創立 30 周年記念事業実行委員会が〈手作り防災かまどベンチ〉の作成を考えた。2010 年の夏にそ

の製作を実施した。完成後にできた 30 周年記念事業実行委員会副委員長である大橋恵美さんが綴った〈どたばた作業日記〉の中で、以下のような興味深い文章があるので紹介する。

平成22年夏(猛暑)。そこには現役保護者がいた。新米 OB もベテラン OB もいた。先生もいれば、生徒もいた。みんなが麦茶を持ち寄り、焼きそばやキュウリの漬物が差し入れられた。ときには意見の違いからイライラすることもあった。手際の悪さに声が大きくなることもあった。ときには誰かの冗談で涙が出るほど笑った。声を掛け合って、それぞれのできることを自然に分担した。そう、とにかく、暑かったし、熱かった。大人になってから、こんなに大勢で汗を流したことがあっただろうか。こんなに真剣になって、ひとつの目標と向かい合ったことが……。まるで学生時代の文化祭みたいに。「かまどベンチ」は宝木中創立30周年記念の寄贈品である。『学校のために、生徒のために、地域のためになるモノ』として製作されたのだが、今思い返せば誰よりも、作った私たちの心の中に大きな熱い思い出を残してくれていたのだ。また「かまどベンチ」製作は、普段は忘れている「非常時」を想像させてくれる貴重な機会だった。災害はいつ、どこで起こっても不思議ではない。しかしテレビで災害のニュースを見聞きしても身近なものとして受け止めるのはなかなか難しい。「かまどベンチ」を製作しながら、この宝木地区の「非常時」とは実際にどんな状況なのかということを皆が考えた。そして確信したことがある。万が一、そのときが来ても私たちは協力し合える。「かまどベンチ」作りがそれを証明してくれた。(どたばた作業日記 2010)

〈防災かまどベンチ〉という一つのものづくりが、地域住民を巻き込み、製作の中で住民間の絆を生み出す。また炊き出し訓練などから災害のイメージを想起させ、防災意識を高める効果もあるのである。こういった〈手作り防災かまどベンチ〉というものに、筆者は大きな関心を抱いている。またこの〈手作り防災かまどベンチ〉を社会的に分析研究して、その大きな可能性をより実証的な価値あるものとしていくというのが、本論文の最大のテーマということをここでもう一度、明らかにしておく。

2.3 研究仮説

様々な活動事例を通して、〈手作り防災かまどベンチ〉というもののイメージは、掴んでもらえたことと思う。第一章の先行研究と第二章の〈手作り防災かまどベンチ〉の活動事例から、ここでは本論文の研究仮説を明らかにする。筆者が、本論文で掲げる研究仮説は、「立木が定義したソーシャルキャピタル促進要因の 5 因子がコミュニティの発展に貢献するといわれる〈手作り防災かまどベンチ〉の取り組みにどのように当てはまるのか」ということを本論文の最重要項目として掲げている。仮説としては、立木が定義したものに、〈手作り防災かまどベンチ〉がそれらの因子を満たすものであるとして、次章では、研究調査概要を明らかにしながら、質的調査でその仮説を実証していくこととする。

3 研究調査概要

3.1 調査概要

本論文の研究では、質的調査の半構造的インタビューと非構造的インタビューを組み合わせた形で用いて、〈手作り防災かまどベンチ〉の製作の担い手となった人々に、インタビューを試みた。この章では、筆者が試みたインタビューからの情報を、立木が導き出したソーシャルキャピタル形成促進要因の5因子のそれぞれのキーワードにあてはめるという分析手法を取り、〈手作り防災かまどベンチ〉が地域コミュニティの繋がりを豊かにするようなソーシャルキャピタルの要素を確認したいと思う。ここで一つの疑問がうまれるのは、なぜ〈ソーシャルキャピタル〉を量的ではなく、質的での調査で、分析研究に踏み切ったのかというところであろう。確かに、ソーシャルキャピタルに関しては、量的調査での分析がほとんどで、質的調査のインタビューで明らかにされる機会がなかったように思う。しかし、立木は漠然として語られることの多いソーシャルキャピタルについてはゆるやかな人のつながりができる〉・〈互いに思いやり、信頼、親切、おせっかいを焼く〉関係・〈お互い助け合い、友達になる〉関係と定義し(立木 2008:55)ソーシャルキャピタルという数的な指針を、一つの定義された解釈可能なキーワードとして、表現した。それによって、質的調査のインタビューという方法にひとつの活路が見出されたと筆者は考えた。半構造的なインタビューの中で、キーワードを含んだ質問からソーシャルキャピタル形成促進5因子に当てはまりうるものを拾い取り分析にかける。また、非構造的インタビューよりソーシャルキャピタル形成促進5因子のキーワードに引っかけられるような回答を一つ一つ分析の対象として、拾い上げることで、質的の調査が可能であると確信した。本来調査の対象は、自治会の人々に対してなどのコミュニティ活動を行う人々の人的な対象が想定されるであろうし、なかなか〈手作り防災かまどベンチ〉の実態として、それに関わった人から、分析にかけられる回答が得られるのかというような懸念もあった。けれども、そういった懸念も含めて調査に踏み切ることで、また新たな研究成果が現れるのではないかという望みを持って、またさらなるソーシャルキャピタル形成促進要因の発見という新たな可能性に質的調査に大きな関心を抱いたので、本研究では質的調査を取り入れたと考えていただきたい。

3.2 調査の枠組み

調査の内容としては、次のようなものである。まずは、ソーシャルキャピタル形成促進5因子のキーワードを明らかにする。半構造的インタビューに向け、また非構造的インタビューの中で分析可能なインタビュー内の回答を、明記する。今回インタビューを実施したのは、2010年11月19日に滋賀県彦根施設の「邂逅の郷」を訪れた時に、福祉施設入居者、施設長、彦根工業高校の生徒にインタビューを実施した。また、2010年12月20日に〈手作り防災かまどベンチ〉の生みの親でもある彦根工業高校教諭の田中良典様にもインタビューを行った。

まず、今回のソーシャルキャピタル形成促進要因5因子についてのキーワードを表1とし、またそれぞれの因子の方向性を表の下に示していく。

表1 調査の枠組み

因子	具体的な尺度の項目
多様な住民参加	1. いろいろな人たちが地域の活動に参加できるように間に入って仲介してくれる人を見つけること 2. 地域の課題を解決する際に、商店街や地域の企業などにも幅広く参加を呼びかけること 3. 様々な住民や商店街、地元の企業などの団体が意見を述べて活動に参加できるようにすること 4. 商店街、地元の企業などと連携すること 5. 共通の課題を解決するためにNPOなどと連携すること 6. 子ども自身の手で行事・イベントづくりができるようにすること 7. 地域にある趣味の会や、井戸端会議などの人間関係を活用すること 8. バザーや収益事業などを行い自主的な財源を確保すること 9. 問題を解決するために活動を地域内でイベント化
イベント活用	1. 子どもと大人と一緒に参加できるような行事・イベントを開催すること 2. 住民が主体となって行事・イベントを開催すること 3. 地域の行事・イベントを企画する際に学校や子ども会などと連携すること 4. 地域の行事・イベントに、住民が参加するよう促すこと 5. 多様な年代の子どもが集まれるたまり場を作ること 6. 地域の行事・イベントを行なうにあたり、行政の支援を活用すること 7. 地域の行事・イベントを行なうにあたりボランティアやNPOと連携すること 8. 地域のたまり場を活用すること 9. 地域の人みんなで、公園や街路、溝などの世話をすること
組織の自律確保	1. 地域が抱える共通の問題を広く知ってもらうこと 2. 地域の課題を解決する時に、頼りにできる人や手助けをしてくれる人を見つけること 3. 役員の決め方や運営が引き継がれるように、マニュアルや、ハンドブックを作る 4. 行政の下請けではなく行政と対等な関係を保って地域活動を行なうこと 5. 地域の課題を解決する際に、関心を持っている個人にも広くよびかけること
興味・喚起・愛着	1. 地域の魅力やウリを見つけ出すこと 2. 地域の伝統・文化・歴史を知ること 3. 地域の魅力やウリを地域内外に発信すること 4. 地域の生活で役立つ情報を集めること 5. 特定のテーマで活動を行なっているボランティアやNPOなどを知ること
さあ	1. 近所同士で努めてあいさつをするよう、近所の皆さんに促すこと 2. 近所同士であいさつをすること 3. 子どもたちが地域の大人たちとあいさつをするような工夫をこらすこと

第1の〈多様な住民参加〉因子のキーワードとしては、〈いろいろな人たちの参加〉〈連帯〉〈地域にある人間関係活用〉である。その方向性としては、〈自治会だけでなく、ボランティア、NPO、商店街、事業者など〈多様なステークホルダー（ゆるやかな関係者）が参加できるプラットフォームをつくる〉〈地域にあるサークルや井戸端会議の場を発掘し、広げ、プラットフォームに誘い、地域活動につないでいく〉〈多様な市民が互惠・対等・平等に参加するための技術を身につけるとともに、多様なステークホルダーをつないで橋渡しをする仲介者を活用する〉〈多様な参加を保証する民主的な組織運営を行なう〉というものであった。

第2の〈イベント活用〉因子のキーワードとしては〈たまり場〉が挙げられる。また、その方向性としては、〈イベントを主体的に企画する〉〈イベントを主体的に開催する〉〈イベントに主体的に参加する〉〈具体的に出来るイベント例〉〈イベントを支援する〉〈地域課題解決のために活動をイベント化する〉といったものであった。

第3の〈組織の自立力確保〉因子のキーワードとしては〈組織の自律〉がある。その方向性としては、〈核となる複数のリーダーと、リーダーを支えるフォロワーの存在が自律のためには不可欠であ

る)〈組織の継続性を確保するために知恵をしぼる)〈自主事業を行うための自主財源を確保する)〈多様な事業者・団体と連携することで、逆に組織の自律性を高めることができる)というものであった。

第4の〈興味・愛着喚起)の方向性としては、〈地域の伝統・文化・魅力・活動、生活に役立つ情報を知る)〈地域の魅力やウリ(自慢できるヒト・モノ・コト)を探し出し、発信する)〈地域で世話を焼くものをつくる)〈『地域』から離れて、『テーマ』を中心とした人の輪もできるので、この活動を通じて地域活動に目を向けさせる)〈地域にあるたまり場が、地域への関心・愛着の源泉になる)といったものであった。

第5(あいさつ)因子の方向性としては、〈様々な年齢・性別・社会階層間で、あいさつを励行する)〈子ども・学校・地域を活用する)〈あいさつを地域に浸透させる技術確立する)といったものである。以上で、それぞれ5因子の具体的な尺度の項目を表であらわし、それぞれのキーワードとその方向性を示すことができた。

4 研究調査分析考察

4.1 結果と分析考察

ここでは、インタビューから得られた回答を以下に示していく。ここで一つ断っておきたいことがある。本論文の構成としては、インタビュー内容から導き出された回答を、それぞれのソーシャルキャピタル形成促進因子に当てはめていき、分析と考察を同時進行で行う。その理由としては、各因子に規範を分けることで、インタビューの回答からソーシャルキャピタル形成促進要因の5因子に当てはめる方が、より結果の分析と考察が行いやすいと考えたからである。また、インタビューの回答と分析、考察を切り離してしまうと、読み手にとっても理解しづらい論文になりかねないという懸念を拭い去るためでもあると理解していただきたい。

ひとまず、インタビュー対象者の一覧を表2にまとめたものを以下に示した。

表2 インタビュー対象者一覧

インタビュー対象者	性別	年齢	インタビュー日	備考
Aさん	F	60代	2010/11/18	施設入居者
Bさん	M	70代	2010/11/18	施設入居者
Cさん	M	60代	2010/11/18	施設入居者
Dさん	M	40代	2010/11/18	施設長
Eさん	M	40代	2010/12/20	高校教師
Fさん	M	17歳	2010/11/18	高校生
Gさん	M	18歳	2010/11/18	高校生

それでは、分析考察に入っていく。ではまず〈多様な住民参加)因子から見てみる。「かまどベンチが完成しましたが、かまどベンチをどう思いますか」という質問に対する滋賀県彦根市福祉施

設「邂逅の郷」の入居者女性の A さんの回答を取り上げる。

〈A さん〉 高校生たちが、こちらに足を運んでくれてほとんどの作業をしてくれた。高校生たちのたくましさに関心した。今日の炊き出しが楽しみ。[にこやかな表情]

話によると、施設の二、三人の人が手伝ったが、ほとんどは、高校生たちにお茶を用意するなどのサポートに回ることが多かったようだ。ただ、炊き出しが始まる前から福祉施設の人は楽しみにしていたのか、かまどベンチの周りにウロウロしている様子が目立った。

次に、「今日が初のかまどベンチの炊き出しですが、かまどベンチにどのような思い入れがありますか」という質問に対する滋賀県彦根市福祉施設「邂逅の郷」の入居者男性の B さんの回答を取り上げる。

〈B さん〉 あまりこれを作るのには参加していないが、今日が(かまどベンチの)開店の日。自分達では(かまどベンチ)は出来なかった。みんなの力で(かまどベンチが)できた。[微笑ましく]

一人では、完成に至らない。高校生の力のおかげでできたと語ってくれた。かまどベンチの製作が、福祉施設に高校生が参加するという機会をもたらしたのである。

次に、「なぜ、小学校との取り組みが展開されていた中で、福祉施設で(防災かまどベンチ)を作ろうという考えに至ったのですか」という質問に対する滋賀県立彦根工業高校教諭 E さんの回答を取り上げる。

〈E さん〉 地元の小学校との連携は、結構取れていて活動も軌道に乗ってきたところで、次に 2010 年は、新たに高齢者との連携が取れば、いいなと考えていました。「邂逅の郷」は市役所の方と連携を取る中で、ちょうど福祉施設の担当の方がいまして、その人から紹介していただきました。その方のお話によると、小中学校は、福祉施設への見学をする活動は頻繁に行なわれている。けれど、高校生ともなると福祉の専門など以外は、福祉施設との関わりは、ほとんどなくなってしまうということを耳にして、ぜひとも「邂逅の郷」という福祉施設で「防災かまどベンチ」を入居者の方と一緒に製作できればいいなと考えました。

「防災かまどベンチ」の製作がなかなか交わることのなかった高校生と福祉施設の入居者との出会いの場を提供し、連携し、地域に新しい人間関係を構築させているのである。また「多様な住民参加」因子の方向性にも示されているひとつのものづくりが多様な住民の参加を促しているということが明らかになっているのである。

続いて〈イベント活用〉因子に焦点を当ててみる。(なぜこのようなかまどベンチを福祉施設にも、と考えられたのですか)という質問に対する滋賀県彦根市福祉施設「邂逅の郷」の施設長 D さんの回答を取り上げる。

〈D さん〉 かまどベンチの取り組みについては、彦根工業高校の生徒さんが、近くの小学校でかまどベンチづくりを手掛けたというお話を聞いていた。工業高校の田中先生よりかまどベンチのお話も頂き、初の試みとして施設の入居者にも何かの刺激になればと思い、かまどベンチづくりを取り入れました。

また同じく(かまどベンチを作っていく過程で福祉施設の方たちになにか変化はありましたか)という質問の D さんの回答は以下のものである。

〈D さん〉 特に、大きな変化はありませんが、何名かは、実際に作業も手伝われましたし、お茶入れなどのお手伝いもしてくれ、少しはかまどベンチに対する思い入れがあったと思います。製作過程の様子を日向に出ながら見学したり、今日のように赤十字社の方に来て頂いたり⁽¹⁾して、蒸しタオルの作り方や災害に対する知識を少しでも得てもらえば、よいと思います。施設の人の防災の意識は低いように思います。こういったひとつの催しで、施設の人が地域の中でより身近な存在となってくればよい。本当は、近くの小学校とも連携して今日の活動をしようと思っていたのですが、小学校側とうまく日程が合いませんでした。今後は、そういったみんなが参加していける場に福祉施設がなればよいですね。

かまどベンチが一つのたまり場を提供し、そこから一つの災害に対する意識を参加した人々に与えるかたちとなった。地域自体が主体的にイベントを主体的に企画・開催・参加というような地域から発信されるものではないが、〈かまどベンチ〉が炊き出しやまたそれだけではなく防災意識を高めるものの役割を果たしている。実際かまどベンチは、浸水予想ラインを明示することで、災害を学ぶ工夫を追加することも出来るのである。〈かまどベンチ〉というものが、そういったイベントを企画・開催するためのひとつの仕掛けになることは、明らかな事実である。この点は、〈イベント活用〉の因子でも見逃すことの出来ないものである。〈手作り防災かまどベンチ〉は〈イベント活用〉因子の未来的な可能性を描き出しているのである。

次に〈組織の自律力確保〉という因子について見てみる。「高校生が主体となって〈防災かまどベンチ〉の製作をしてきたと思いますが、彼らがこの〈かまどベンチ〉の製作の経験をするうえで、どの部分に変化や成長を感じましたか」という質問に対する滋賀県立彦根工業高校教諭 E さんの回答を取り上げる。

〈E さん〉 生徒の中には、引っ込み思案の生徒が今までの自分とは違う一面を発見したよう

で、子どもたちと積極的に関わるような場面も垣間見ました。また、進学する生徒が防災研究を専攻のテーマにする子もいました。また〈かまどベンチ〉の製作のはじめはアルバイトや仕事となにか面倒くさがって「給料が出るのか」といった冗談半分の話をしてくる生徒もいました。しかし実際に小学生と一緒に製作を繰り返す中で、「やりがい」をみつけて、この活動が役に立っているのだという自信も持ってきて、とても成長したように思います。小学生との絆もそうですが何より、高校生同士の仲間意識も強くなってグループ間の中の良さも目立ちました。

また同じく「かまどベンチに関するハンドブックの作成で苦労した部分や、また、そういったものを活用してかまどベンチを製作した地域の反応はどのようなものでしたか」という質問のEさんの回答は以下のものである。

実際に、これを製作しようと思ってから形にするのに、とてもじゃないけど説明しきれない苦労があった。本当に高校生が出来るのかとか、何回も先輩の教師の方に相談もしましたし、レンガー一つにしてもこれでは火に掛けた時にもたないというようなことを何度も繰り返しやりました。(ハンドブックに関しても)小学生にもわかりやすくという思いがありました。そういったところで交流も深まったかな。(かまどベンチの活動で)私自身本当に人と人との繋がりができたと思います。この動きで本当に色んな人との出会いがありました。

次に「かまどベンチづくりの中でどんなところに楽しみを感じますか」という質問に対する滋賀県立彦根工業高校3年生Gさんの回答を取り上げる。

小学生にはまずかまどベンチに興味を持ってもらわないといけない。初めは、教える余裕なんてなかったけど、何回か作るうちに、子供たちに教える立場になっていました。

Eさんも積極性を生徒から感じている。また筆者自身も驚かされたのが、Gさんの小学生に対して〈かまどベンチ〉に対する知識や技術をもつ自分が教える立場だというリーダーとしての意識を持っていることだった。また、高校生がこの活動の中で一つのチームとして力を併せて、活動の中心となり、お互いの絆を深めている。またそれを支える形で、小学生が存在し、福祉施設の入居者の協力やサポートも実現しているのである。リーダーやフォロワーの存在が確認できるという点に注目する必要がある。連携という点でもその組織の自律を成し遂げる連携を〈防災かまどベンチ〉は可能としている。また自主財源を確保の確保という点では、ワンコインの寄付政策などの提案もある。また、実際に神戸市東灘区の魚崎小学校の保護者が挑戦するなど、また栃木県宇都宮市立宝木中学校で〈防災かまどベンチ〉の製作の実施がなされた事例も先立って紹介しているので〈組織の自律〉というキーワードにも〈防災かまどベンチ〉は大きな可能性を有しているのである。

引き続き〈興味・愛着喚起〉因子についても分析考察を行う。「かまどベンチでどんなお手伝い

をされましたか」という質問に対する滋賀県彦根市福祉施設「邂逅の郷」の入居者男性 C さんの回答を取り上げると「手伝いという手伝いはしていない。ただ時々かまどのそうじをした」また、なぜそうじをしたのですかという質問に対して、同じく C さんは「やはり高校生だけじゃなく、何かしたかった、掃除くらいならできる」という回答をした。

次に「かまどベンチづくりの中でどんなところに楽しみを感じますか」という質問に対する滋賀県立彦根工業高校 3 年生 G さんの回答を取り上げる。

〈G さん〉 知識や技術が身に付けば、小学生との交流も深まっていき、ちょっかいをかけてくるようになって仲良くなっていくのが楽しい。

また、同じく「かまどベンチづくりの中でどんなところに楽しみを感じますか」という質問に対する滋賀県立彦根工業高校 2 年生 F さんの回答を取り上げる。

〈F さん〉 やっぱり手作りなので一つのかまどベンチができた時は嬉しい。小学生もかまどベンチの看板を協力しながら作っている。小学生は生意気な部分もあるし、イラッとするような時もあるけど、[子供たちが]寄ってきたら可愛いかな。数回一緒に作業をしていると仲良くなる。

この点については、その因子の方向性の中にある「地域で世話を焼くものをつくる」や『『地域』から離れて、『テーマ』を中心とした人の輪もできるので、この活動を通じて地域活動に目を向けさせる』『地域にあるたまり場が、地域への関心・愛着の源泉になる』というような視点が〈防災かまどベンチ〉には、ぴったり当てはまる。また〈手作り〉という部分に多くの付加価値がある。〈手作り〉は既存のものよりはるかに思い入れや愛着が入り込む。そう一部分が、なかなか製作には関われない入居者の掃除という行為に反映されているのである。

最後に〈あいさつ〉の因子について分析考察を加えていく。「あいさつという観点からお話をお聞きしたく思っておりまして、高校生のみんなは、小学生や高齢者と関わる中で、自らが訪れて作業をするというところに〈防災かまどベンチ〉の意義があるように思うのですが、初めて訪れる時とは何か雰囲気として変わるものがありましたか」という質問に対する滋賀県立彦根工業高校教諭 E さんの回答を取り上げる。

〈E さん〉 おそらく「防災かまどベンチ」が即席のものだと、あいさつは堅苦しいよそよそしいもので終わると思うのです。ただ「防災かまどベンチ」を作成するには、なかなかの時間が必要で、何回もその場所に通う必要があります。その「何回も通う」というところに意味があると思います。そういう中でだんだんと「あいさつ」をする雰囲気になっていくのだと思います。

また、「ほかに印象に残っていることはありますか」という質問に対する E さんの回答としては、次のものである。

〈E さん〉 これは、あいさつというかどうかはわかりませんが、小学生が、製作の時に前回はいたのに今回は欠席している高校生の生徒のことを気遣ってか「今日は(あのお兄ちゃん)は来ないの」ということを聞いてきた小学生もいました。(かまどベンチ作りをそこで始めて)4 回目くらいだったかな。これって何回も通うからこそ起こることだなんて思いますね。また「邂逅の郷」での「防災かまどベンチ」の作成の時にも、入居者の方たちから「次はいつ来るねんや」といった言葉をいただいたことがありました。その時は何か胸にグッとこみ上げてくるものがありました。



図 7: 滋賀県彦根市福祉施設「邂逅の郷」で完成したかまどベンチその 1



図 8: 滋賀県彦根市福祉施設「邂逅の郷」で完成したかまどベンチその 2



図 9: 彦根工業高校の生徒と「邂逅の郷」の入居者がふれあう様子その 1



図 10: 彦根工業高校の生徒と「邂逅の郷」の入居者がふれあう様子その 2



図 11: 完成披露会の後に行われた実際の炊き出しの様子その 1



図 12: 完成披露会の後に行われた実際の炊き出しの様子その 2

この因子は、〈かまどベンチ〉ただの一回きりで終わってしまう取り組みではないという点に注目して、分析をしていきたいと思う。〈防災かまどベンチ〉を何日もかけて〈手作り〉で行うことですぐではなく徐々に〈あいさつ〉ができるような関係や信頼が築かれていくのである。もちろんこういった回数の積み重ねの中で様々な年齢・性別・社会階層間で、あいさつが行われる。〈防災かまどベンチ〉の製作によって、あいさつの技術の確立というよりは、そのあいさつを行う場所の提供や、〈防災かまどベンチ〉という一つの目標にお互いが汗を流して協力を繰り返す中で、自然とあいさつを行う関係になっていくというのが、このインタビューから示されているのである。

4.2 結果からの考察

仮説を立てて行った調査分析考察より、新たな考察としての質的調査のインタビュー方法を用いてその指標を〈ソーシャルキャピタル形成促進要因〉に絞って、〈手作り防災かまどベンチ〉の有効性を示したが、その結果は、4章1節で明らかにしたように、5因子それぞれに、有効性を示すインタビューの回答が得られた。そういうわけで、〈手作り防災かまどベンチ〉がソーシャルキャピタルを高める上での機能を果たすという新たな見地も見出されたのである。また逆に、立木が示した指標も有効性を満たす正しい指標として、質的調査の観点でも検討が可能な点も再確認されたということでもある。

おわりに

今日、様々な災害が我が国を襲っているのは言うまでもない。しかし、それに対してただ屈するだけでなく、地域コミュニティの動きや、行政の試みが活発に行われているということも見逃してはならない事実である。そういう中、本論文では〈手作り防災かまどベンチ〉というものをテーマとしてそれが社会的にはどのような知見で語ることが出来るのかということを焦点とした。先行研究の中に示されていたソーシャルキャピタルは、今回のテーマである「手作り防災かまどベンチ」の最重要の指標として現れた。またそのソーシャルキャピタルの形成促進因子に迫った立木教授には、感謝の意を示したい。これから、「防災かまどベンチ」に限らず、地域コミュニティが廃れることなくより一層強固なものとして、継続して形作られることを強く願うとともにそうした活動に積極的に参加していくことの重要性を本論文から学べたかとは筆者自身の豊作である。

本研究において、まだまだ改善すべき点が多いのも周知の事実である。例えば、質的調査により量的な研究が出来ずに、インタビュー結果から得られた回答の正当性については、議論の余地がある。また、ソーシャルキャピタル形成促進要因を不用意に質的調査に取り組むという行為に対しても議論すべき点は多くあるだろう。しかし、ここであえて質的調査のインタビュー方法をとったことに対する新たな展望も評価の対象と出来るということも確認していただけると有難い。また、そのような観点から見れば、研究成果の価値も大いに出てくると思う。

最後に筆者が、今後の課題として社会学研究者にお願いしたいことは、コミュニティがどのよう

に継続性を保ちながら発展していくのかというソーシャルキャピタル形成促進要因では測ることのできない新たな側面に対する研究についての議論が起こることを期待する。また今回の研究で、この「継続性」の議論を取り上げられなかったことに関しては、研究のテーマから逸れる可能性が大いにあったこと、また、調査を通す中でそういった「継続性」の議論が起きたという時間軸の点でも、困難だったと理解していただきたい。これからの様々なコミュニティ論やソーシャルキャピタルに関する発展的な研究に大きな期待を抱いて、本論文を閉じたいと思う。最後まで、私の研究論文にお力添えをしていただいた皆様には本当に感謝をしている。

注釈

- 1) 2010年11月18日に行われた滋賀県彦根市福祉施設「邂逅の郷」で行われたかまどベンチ披露会と炊き出し時に、赤十字社の滋賀支部の方々が災害高齢者生活支援講習会を行われたという経緯がある

参考文献

- 防災教育チャレンジプラン, 滋賀県立彦根工業高校都市工学科, (2010年12月18日, <http://www.bosai-study.net/2009houkoku/plan.php?no=1>).
- Hillery, G. A, 1955, *Definitions of community, Rural Sociology*. (=1978 山口弘光訳『コミュニティの定義』, 鈴木広編, 『都市化の社会学』誠心書房).
- 磯村英一, 1987, 『コミュニティと地方自治』ぎょうせい.
- 岩崎信彦・矢崎澄子, 2006, 「序」岩崎信彦・矢崎澄子監修, 玉野和志・三本松政之編『地域社会学講座 3』東信堂, i - iii.
- 岩崎信彦・立木茂雄・鰐坂学・杉本久美子・小松秀雄・西村雄郎, 2008, 「地域ガバナンスとコミュニティ意識」浅野慎一, 岩崎信彦, 西村雄郎 編著 『京阪神都市圏の重層的ななりたち』昭和堂.
- 内閣府, 2010, 広報誌, 「ぼうさい 5月」.
- 内閣府ホームページ, 防災情報, (2010年12月18日, http://www.bousai.go.jp/kouhou/h22/05/leader_01.html).
- 大橋恵美, 2010, 「かまどベンチ どたばた日記」.
- 奥田道大, 1971, 「コミュニティ形成の倫理と住民意識」磯村英一・鶴飼信成・川野重任 編『都市形成の倫理と住民』東京大学出版, 135-177.
- Putnam, Robert. D, 1994, *Making Democracy Work, Civil Traditions in Modern Italy*, Princeton Univ P. (=2001, 河田潤一訳『哲学する民主主義—伝統改革の市民構造』NTT出版).
- Putnam, Robert. D, 2001, *Bowling Alone, The Collapse and Revival of American Community*, Simon & Schuster. (=2006 柴内康文訳『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房).

- 鈴木広, 1978, 『コミュニティ・モラルと社会移動の研究』アカデミア出版会.
- 立木茂雄, 2007, 「ソーシャルキャピタルと地域づくり」『都市政策』(神戸都市問題研究所)
(127)4-19.
- 立木茂雄, 2008, 「ソーシャルキャピタルの視点から見た地域コミュニティの活性度と安全安心」
(都市問題研究)60(5)通巻(689):50-73.
- 魚小 F F 〈魚崎小学校おやじの会〉ホームページ, (2010 年 12 月 21 日, <http://uoshoff.web.fc2.com/>).
- 山内直人, 2003, 『ソーシャルキャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて』
平成 14 年度内閣府委託調査, 内閣府 (委託先: 株式会社 日本総合研究所), 内閣府
NPO ホームページ, (2010 年 12 月 20 日, <https://www.npo-homepage.go.jp/data/report9.html>).